

MRSA 肺炎の治療効果に影響を及ぼす因子の検討 ～VCM 投与患者における検討結果～

小倉潤子 加藤彰範 小林理栄 新井亘 増田裕一
上尾中央医科グループ 上尾中央総合病院 薬剤部

【目的】

VCMの有効血中濃度下においても早期に十分な治療効果が得られないMRSA感染症例を経験する事から、患者背景を中心に検討を行った結果、女性及びWBC低値が著効因子となった事を昨年の本学会で報告した。今回、MRSA肺炎症例を対象に検討した結果を報告する。

【方法】

調査期間：2007年4月～2009年3月。対象：成人患者76名。効果判定：①体温37℃以下への低下、②WBC9000/ μ L以下への低下、③CRP30%以上の低下、④MRSA減少もしくは消失の4項目のうち、投与開始7日以内に2項目以上を満たしたものを「改善」、それ以外を「その他」とした。①～④は日本化学療法学会の臨床効果判定基準を参考にした。調査項目：年齢、性別、栄養摂取方法、主病傷名、診療科、呼吸器装着の有無、他菌検出の有無、併用抗菌薬の有無、投与日数、血中濃度、体温、各種臨床検査値。統計学的解析：「改善」と「その他」の2群に分け単変量解析及び多変量ロジスティック回帰分析を行った。

【結果】

効果判定結果：「改善」52名、「その他」24名。単変量解析結果：改善因子として女性、WBC低値で有意差($P < 0.05$)が確認された。多変量ロジスティック回帰分析結果：単変量解析で $P < 0.25$ となった12項目の多重共線性を確認後、治療効果との相関が高い7項目（女性、整形外科系疾患なし、循環器科入院、真菌検出あり、ピーク値、WBC、CRP）での解析を行った結果、改善因子として女性($P = 0.04$ 、OR : 3.6、95%CI : 1.1-11.9)で有意差が確認された。

【考察】

日本では女性より男性の方が呼吸器感染症の発症率、死亡率共に高い傾向を示すとの報告がある。男女の社会的状況（生活環境、労働環境、家庭環境、医療環境等）の違いの他に免疫機能の違いがある事が指摘され、女性は男性に比べ獲得免疫系が強い可能性が示唆されている。未解明な部分も多い為、今後も調査デザインの再検討、症例の集積を行い原因の究明を図っていく。男性患者においては初期TDM実施時点からより厳密な治療計画を立てるよう心掛ける。